

ヨシダナ

一六九号



(訓 校)

一 禮儀を正しくすること。

一 言葉づかひを丁寧にする。

一 清潔整頓に注意すること。

夏休の注意

楽しい楽しい夏休が来ました。山も海も青葉も光りがやいて皆
さんとつしよに遊べるのをよろこんでゐるやうです。四十二日間のこの長い
長い夏休をなにもしなほでホカンと過してしまつては本當にもつた
ない氣がしますね。おまけにだらしなくくらししてゐると、病氣にかつた
り、わるいくせかついたり、一學期に學校でおそはつたこともみんなわす
れてしまひます。けれど、この夏休を上手に利用すれば、からだはま
ます丈夫になり、良い習慣がつき、學業の成績もぐつと上つて誰からも
ほめられる、立派な生徒になることが出来るのです。後になつて後悔しな
やうに、さあ、次の大切な注意をしつかり守つて、毎日毎日、きまり正し
くくらししてまゐりませう。

一 校訓を實行すること。

大村小學校児童行進曲

一太平洋の中安に 青波寄する小笠原
聳ゆる旭の山高く 麓の野辺に生ひ立ち

二小国民も波遠く 千代田の城の私陰に
夢やすられ、大村の響びの庭に等々穢り

三未来を飾る錦衣の 色どり、つゝ又海に
楓執る腕を養ひて 神祕の鍵を探せり

四いざ兄弟と諸共に 日陰惜みて一寸らに
今こそ励め文の道 後にはまこと身の誉

學校日誌より

七月十三日 児童園藝会に支度より樹下のアシ
カノ苗三本完配布

七月十七日 本日より全校職員児童の奉仕活動
に依り舊大村町の埋立て工事を開
始

七月二十日 午前七時十分第一學期終業式も行

七月二十日 本日より暑中休業八月十日まで

掛書贈

六月三十日 保復石会基本金へ
金五圓也

小内初江殿
左 昭二殿

七月八日

金六圓也 児童園藝会へ

大田金松殿



童話に就いて

東 達 夫

吾々は童話に耳を傾ける児童の顔のあまりの眞剣さに、いつも驚かされる。童話が語られると其處には優等劣等の差別もなく、殆ど全部の者が一樣に眼を輝かせ、体を乗出し、我を忘れて聞入り、とする。かくも不思議な魅力を有する童話とは、一体何であらうか。児童の心を絶對的に支配するその玄妙な力は、何處より來たるものであらうか。單に童話を大人の口から出るでまかせの話、又は荒唐無稽な作り話と考へる人には、之は子供を喜ばせるだけにしか役立たない。教育上無價値なものに見えるかも知れない。否、反つて童話は、非科學的事象を子供に信じさせることに依つて、児童の心意に悪い影響を及ぼす有害なものだと断ずるかも知れない。だが併し、古來より云ひ傳へられた有名な各國の口碑童話、或はペロ、ハウス、アンデルセン、トリス、トイ等の優れた創作童話の内容を深く精密に研究してみれば、その考へ方が極めて皮想的なものであり、一片の杞憂に過ぎないことを知るのである。

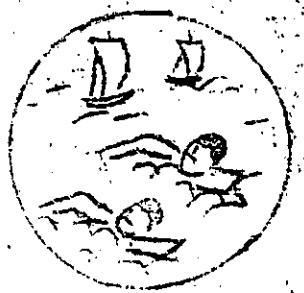
凡そ童話が児童の心を魅了し盡す根本的の迫力は、その中に流れる正義の概念である。正しき者は如何なる場合にも、結局に於て邪なる者に勝ち、善惡の行為に對する因果應報の法則は、生死の二界を超越して貫徹するものであると云ふ、確固不拔の信念である。この善惡の嚴然たる判別と、道義的理法の完全なる遂行が、露骨にでなく、藝術的に取扱はれ、詩の衣を装はれた時に、児童は限りなき情緒的喜悅と、道德満足とを見出すのである。この正義觀念なき、或は例へ取扱はれて、面白くも、児童が本來有する道德意識に比して、低劣である童話は、畢竟児童にとつて面白くない童話であり、又本質的に價値のない童話と云はねばならない。人生の經驗には全く乏しい児童に、行為の

價値を認識せしめ人は如何に生くべきかと云ふ問題を無味乾燥な理論ではなしに詩的且美しい物語を以て力強く教へるのが童話本来の使命である。

次に童話は如何にその筋が自由奔放で荒唐且つ不自然に見えてもその中に一貫した必然性児童の心理にひつたりと適應せる合理性云はれ詩的真実性が存在してゐなければよき童話とは云へないし、又あらゆる児童をして耳を傾けしむる力のないものである童話を非科學的であると難するのには科學と自然科學にのみ限つた狭い見解であつてもつと視野を擴大し精神科學の分野より考察すればフロイドが夢を分析しその合理性を明らかにした如く一見奇怪至極の童話の筋に民族心理並びに児童心理の根源的表示を見出すのである例へば童話に於て太陽や月が擬人化され鳥や獸や人間の言葉を語るの古代理族の宗教心理であるアニミズムの現れでありかつて吾等人類の祖先がなした様に児童はこのアニミズムに依つて彼等の幼稚な宗教的觀念を満足せしめ自然を詩的に又統一的に解釋せんとするのである又我が國々有名な口碑童話花咲か節や桃太郎に見られる類似せる事件、言葉の反覆や鬼退治者退治の物語は児童特有の韻律愛好の本能及び闘争本能、恐怖本能からの説明せらるべきものであるかく觀心來ると童話の非科學性は大人の目に不自然らしく見えるものであつて児童の心理には當然のものとして受容せらるゝ性質のものである。

之を要するに眞に價値ある童話とはその内容に満ち溢れる旺盛な正義觀念と児童の心理に即せる發洩とした表現形式を具へており同時にその展する民族の心理國民性々特色を充分に發揮してゐるものでなければならぬのであるかくてこそ童話は児童にとつて誠に心の糧となり健全なる道徳心の養成に藝術的陶冶に閑却すべからざる意義を持つのである。

(終り)



三三の

つりかた

ま、一まい、もつて、来て、あさい、ところ、
カ、て、ゐると、むが、から、大きい、
み、が、来た、ので、お、が、ひっくりか、
つ、て、め、や、ロ、や、は、海、が、水、目、ら、け、
に、ほ、りました、ほ、く、も、ほ、やく、大きく、
座、つて、大きい、せい、との、や、う、に、お、き、
で、な、みの、り、を、し、たい、と、思、ひ、ま、す。

おまげ

横山 昭

なつやすみ

杉山 昌夫

その心、おまげ、に、い、た、時、の、こ、と、
です、く、る、い、お、の、さ、ば、に、は、あ、か、い、
カ、ヌ、ー、と、白、い、カ、ヌ、ー、が、あ、せ、ん、で、
う、な、み、が、十、二、く、よ、せ、て、ゐ、ま、す、
そ、こ、で、大、き、い、せい、と、が、い、た、に、の、
つ、て、大、き、い、お、ま、の、り、を、し、て、ゐ、ま、す、
大、き、い、お、ま、の、り、が、来、る、と、い、ま、に、
し、て、来、ま、す、あ、ん、き、り、お、も、し、ら、い、
で、ほ、く、も、ほ、く、は、お、い、が、ん、か、ら、
お、ま、の、り、が、来、る、と、い、ま、に、
し、て、来、ま、す、あ、ん、き、り、お、も、し、ら、い、

柳 沢 登

お父さんが「ひやうーどろく」といつたのでみんながどつと笑つた。それから當夫は「まいこと考へた」といつた、見て居ると線香花火の黒いのを出しては紙に入れて早くマツチをつけばといつたのでつけてやるとそのまゝ出ないでやけてしまつた。それから三連發をやつた、大きな音がしたと思ふと火の玉が五六間先をでんと行つたのでびつくりした、やはり私たちが線香花火が一番出たと思ふ、ちんくともちんくや、やなぎの葉の出るありさまは暑い夏の夜を忘れさせる。

▲ は、いや 高内 利子

父島に来てはじめては、いやを食べましたが食べつけないで初めはおいしくありませんでした。が、今は大好きです。は、いやには女の木と男の木とあるさうですが男の木は實がならないで花だけさくさうです、私たちが

は大きい木と小さい木とあります、小さいのは種が落ちて生ゝたのですから女が男がわかれませぬ、私は女だといふと思ひます、二本もば、いやがめれば毎日食べられるからです、お母さんが「實のなる木を食ふにはば、いやの枝から取木にしておくとよいは、いやが出来るさうです」とおつしやいました。内地のくだものは大抵枝にたりますから、いやは大きな木のみぎにたくさん重り合つてなるのは面白いと思ひます。

▲ ちやうちん 行列 沼田 順子

昨晚皆ちやうちん行列をしました。二列にいらんであつた屋敷をぐる／＼まわつてゐるうちにセツチやんが「およつと今度組に合れてしやう」といふとセツチやんとお母さんと「おん私とセツチやんとお母さんと合つてしげさんなりなとひで子さんがいつた、それから二組に分れてあつた屋敷を廻つた、一しよにゐる時にちやうちんを高く上げた。



尋五綴方

共同一致 神山桂造

小さいく、あのありが僕の家の表の方に何かはこんでゐた、それは小さい虫であつた。始は虫を取つたからよるこんで家に持つて行くのだと思つたが後から、小さいありが卵の様なものを持つて来る。僕の鼻にハへがはいつたから思はず「ん」とやつたのでたまらない、ありは一度に散らばつた、僕はかわいさうだと思つたが出てしまつたものだからしやうがなかつた、暑さにもまけず共同してやるからあんな虫もはこべるのだ、共同一致の力は大きなものだ、僕等のだぶうめエ等もみんなが一生けんめいだから今に出来る上るだらう。

母 木村 タケ

「おん」と考齒が聞へた、おんや船が来ましたよ」と思はずさけんだ、波止場からおんが来た、お父さん、これでお母さんが来るのではありませんか、するとお父さんは「ん」として、「これ来るのだよ」とおつしやつた。私はうれしくてたまらなかつた、走つて行くと波止場には人が大勢いた、早くおんが来ればい、なあ」とおんと言つていた、おんも早く来た、誰かおんをちやんとおんがした、何だか喜一の聲ににいてたから走つて行く」とおんは喜一であつた。

砂糖しほり 中道 秀男

「おん」といふ物音に目がさめた、飛び起つて見ると砂糖をかきしほつていた、始めて見たのでうれしくてたまらません、急いで顔を洗つて来て飯を食ふのもわすれて見續けていた、おんさん、何だか」とおん向きもした、おんは返

事をした。朝飯はよ。朝飯をら後で食べるよといひ返した。見ているうちに襟も少し砂糖を印をはさんで見たくなつた。皆手打ちのなみ様に熱心にはさんである。砂糖をいはいさむと、い、い、と音がする。腹がすいたので朝飯を食べに行つた。

海 あそび 横山セツ

波は高く空はよく晴れて私の好きに泳ぎ日社である。急いで行つてみると友達が大勢泳いでゐた。私も行つて飛び込んだ。氣持がよい。友達と二人で水の中に顔を入れ、プーと吹くとプーくとあわが立つ。面白く入つた。鼻に水がはいつた。くしゃんくしゃんとしてもつらい。さん橋の上にあかつて二人で泳ぐや、してゐると大波が来た。きぬちやんはころかつて落ちた。私はころかつただけであつた。それからきぬちやんに研いで、とおぼなかつた。私はプーとふくれるからと言つて、おぼとつけた。二人はたがひに見

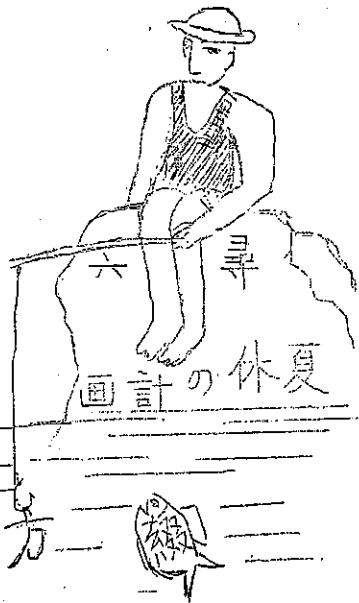
合つて笑ひ合つた。

僕の仕事 原田年光

どうも人かけが僕の仕事である。僕がしたくない時には足がいたじ、といつてミヤボウにやつてもらふ。ミヤボウがどうもよく時を見ているとどうも人の両はだに二本の牛をのせ、しりを高く上げてどんく、進む。僕はどうも真中に在身をつ、横になつてしりを上げて進む。行く、これからはどんな事があつてもやを誰にした、今日も足がいたか、たがやつて見たら、何でもない。それから朝飯をたべるのです。

花火 浅沼誠

ドン、と花火の音が聞えた。僕は家と表へ出て見ると子供が大勢集つてゐる。きれいな電氣花火や音の出る大砲花火、いろくの花火をしてゐる。向ふでも誰かが手に持つてかけて行く。大勢でするり、此の頃はにぎやかになつた。しかし注意しないといふはないです。感



夏の休みの計画 鷲澤寛

- 一 僕の夏休みの計画は左の通りである。
- 二 僕は夏休を楽しく送る考へである。
- 三 勉強し夏休の友。算術は一學期の復習
- 四 遊び 防風林にて涼みながらあそぶ
- 五 仕事 風呂もし
- 六 研究 圖画 手工
- 七 一日の時間割

午前六時 起床 七時—九時 勉強
九時—十二時 研究とあそび
十二時 昼食

午後一時—三時半 あそび

三時半—五時 風呂もし

六時 夕食

七時—八時 勉強

八時半 就床

以上

夏の休みの計画 石津弘子

楽しい夏休がやつて来た。夏休の間親に心配をかけず一學期に成績が悪かつた學課の復習をし大いに泳いで身体を丈夫にします。朝は五時に起きて食事の仕度をし、家の掃除を終へて朝飯に向ふ。六時半から夏休の友を勉強し、讀方なり算術を七時半まで復習する。八時まで遊び大村へ来て地圖の手工をして書飯に家へかへる。一時間ひるねをして洗濯物をたむ。

一時から三時まで遊び夕方米ときお風呂をたきなどして泳ぐ。

夕飯をすませて本をよむ。遊ぶ時集めた二枚具を箱にそろへて床につく。八時である。

長い間の夏休みを楽しく愉快に暮らませう。

◎ 夏の朝 笠本 良子

とまりからかへり手早に薄曇を片付けて庭へ出た。するともうおばさんは朝飯の用意をして居た。

「おばさんお早ようござおます」とおばさんはいつた。ずいぶん早いので「今日は日曜でせう。ゆつくりおやすみなさい」とおばさんはいつた。私は庭に出て表の方にまはつた。そこにはフロックスが朝の涼しい空気を吸ひながら氣持よくきれいに咲いて居る。次の畝に行くと黄色の「ひまわり草」が肩をならべてふらふら朝風にゆれて居る。夏の朝のすみ通つた空氣の中に草木が思ふ存ぶんのびて行く様は實に氣持がよい。

◎ かにフリ 雨宮登美子

朝をよ／＼と吹く風にさらはれてかに釣りに行つた子供が居ました。私が後を追つて行つて見ると弘ちやんに幸四郎さんでした。私は足音をしのばせおつと近づいて行くとニ

人はしやがんでしきりにかにを釣つて居ます。「わつあ」とおどかしますと弘ちやんはとび上つて「あつおどろいた。じつさいだね」といひました。どうして。私は十三才よ」と私は笑ひました。弘ちやんも笑ひました。間もなく幸男さんが「釣れた」とうれしうに叫びました。「何が釣れた。魚かい」「魚は海だよ、今つたのはかにだよ」

かにの釣り方は面白い。糸に餌をつけて穴の中にころがすのです。又釣つてはにがし釣つてはにがして居るのも面白い。ふと氣がつくと太陽はもう高く上つて居ました。私は急いで家にかへつて勉強しました。

勉強がすむと又行つて見ますとまだ弘ちやん達はかにフリに夢中です。私も仲間にはいつてつると面白やうに釣れたのでにがしてやるのも忘れしませんでした。家へかへらうと思つて鐘を持つと重くて持てません。中はかにで一ぱいでした。私は鐘をあけてやりました。かにはいうれしさうに泡を吹きながら穴にはいつて行きました。

高一級方

僕は帽子である。藤流清

僕は帽子である。大きな帽子會社から仲間の帽子と共に一ダースづつ箱に入れられて小松といふ店へ来た。さうして店に飾られると間もなく今の主人がお父様と一しよにきて僕を買つて歸された。僕は其の時から二年間坊ちゃんに仕へん毎日々々大切にかぶられてゐるが長い間には學校の歸りに雨の爲にずぶぬれになつた事もあるし烈しい風にあふられて坊ちゃん頭から吹き飛ばされてもう少いで溝の中に落ちさうになつた事もあった。初め新しい頃は黒く光つてよい帽子であつた僕も雨やほろりの爲にだん／＼よごれて大分色も変つて古くなったし、ふさしの草も破れ出たから今度坊ちゃんも中學校に入學するやうであつたら僕もお暇を頂いて新しい帽子と代つてもらふたいと思つてゐる。

私の家 鶴千賀子

私の家の庭には如何にも過い所を知りやうに芭蕉が植えられてあります。小さな青いバナナ、ふさふさが下つてゐて今日はまつと雨はうたれてゐることをせう。小さなバナナが葉をゆらくさせてゐます。

お母さん達は皆東京へ行かされたのでお父さんと二人でがらんとした家に寝違さしてゐます。私の勉強室には色々自分で作ったものがはりつけてあります。お机の上には色とりどりの造花が等立の中におさまり、何時も裏がず美しい色をしてゐます。砂原の近所は大い早寝早起きです。午後七、八時頃になるとふと静まり砂利をふみながら表を通る下駄の音までよく聞えます。朝私が五時半頃お目ざしすりながら御飯をたいてゐると其所の所の子達が雞のこけりこけりの聲と一しよに起きるともう其の頃は皆近所の子が表を突騰こけりこけりしてはねまは

いてある。濱に出て海を見ても、矢張朝焼の紅に染つてゐる。しばらく海を眺めてゐると、今まで何も見えなかつた二見湾の遠近に、漁師がカヌーに乗つて沖に行くのが見えた。やかてあたりの静けさ、破る發動機船の音も聞えて来た。濱におりて、柔かな砂の上を歩くと、踏み砂はさくさくと音をたてる。自然のあまりの美しさ、に僕は龍舌蘭の茶蔭に腰を下して、茫然と見とれてゐた。その瞬間、曉雲の絶間より、ぬれいづる赫々たる旭日の光は、パツとあたりを照らし出した。僕には旭日が此上もなく神々しくおごそかに見えた。

回夏

佐藤平次郎

僕達の待ちに待つた夏が来た。僕は海の子だ。毎日海に行く。朝かに、磯刺と、島で育つて早や十五年は夢の中に過ぎた。毎日あの波の面白い音楽を小守唄とき、木の下に眠るあの頃の僕は小さかつた。それから今日まで、海を唯一無二の親友として育つて来たのだ。夏にすれば尚一層面白い。午前の授業を終れば、午後から

海は僕達の来るのを待つてゐてくれるのであらう。白い手を指出して招いてくれる。寧ろ何とも云はれぬ、好い氣持だ。夕方かすりに身を包み、散歩すれば、見ゆる限りの山々は、黒い影を海面に寫してゐる。近くの山に生え繁る木々は、さわ／＼と涼しい風を送つてくれる。白いカヌーは鏡の様な海面を、こぼれ、真圓い月は澄んでゐる。燈臺の青い光、月の光、わたれる光、漁船の赤い光、色までつて波間に輝いてゐる。僕は夏と云ふ言葉、聞いたばかりでも満足する。

回夏の樂しみ、菊池英行

夏の樂しみは、あの荒狂小土用波に乗ることだ。「ドンカッ、ア」と裂ける大波は、岸に向つて猛進する。此の大波と共に進むのだから爽快極まりない。昨年の土用波を想出して、血湧き肉躍る思いだ。夏の海、磯には、たはむれる幼児も、一度大波荒狂小や、姿をかくし、少年青年のすがすがしさに板を持つて、大波の来るのを待ちかまへてゐる。中には良く泳げるもの、のが大波にのめられるのも、氣の毒だ。あ、早く土用波が立てばよい。



「萌ゆる若草」

青年學校だより

窓

◎ 開けよ窓を——心の窓を。

窓を開けて見よ、そこには炎熱焦くが如き土用の炎天下にも、清涼の世界が展開する。清新な翠に包まれて、和らかな涼風が送つて、限りなき生々歡喜の囁きが聴えてくるではないか、神び行く若草、暢びんと、如何なる場合にも遭遇しても、先づ、静かに自然の粧に心を放てよ、炎天下に伸びる草木を、早拔に枯死に類しつても尚動するなき路傍の草を、心して静かに見よ、射らなだらかな真緑の斜面は、鋭い其觸角を矯めるであらうから、

東

天の白むを待ち、臥床を蹴つて、家を出て、後時間、烈照天日の下に働いて玉の如き汗を流し、腰辨に一杯の水を添へて舌鼓をうつて、又聖なる勤勞幾時間、朝のすが／＼しかつた衣は袴は、土と埃りとに染れて最早朝の姿を止めぬ、然し其職務の神聖を認識する偉丈の青年には、勤勞の名譽の刻印の如く、清く尊き汗であり土埃りである。アア汗は修養者にとつて無二の香水である、青年働いて此の尊き香水の香を放たんか、或は又暑を避けて陰下に臥そべつて涼を貪り、店頭で求めた香水を身に放つて、快とするか、青年よ若人よ、勤勞の香水は、やがて其人の修身齊家、愛郷の礎を固むる水となるべく、求めた、香水は終には其身其心に腐蝕の因を養ふやうなもので、懼るべまではないか、尊い勤勞の汗、香水、勤勞の、

伸び行く若人、郷等須らく此の精神に徹底して、多量に此の香水を産出すべきである。我らは
双手を挙げて之を迎えるものである。

本年度徴兵検査に於ける、我校受検者中の出席率は良いとは申されませんが、合格者は十六名中
甲種七名と去ふ成績でありました。此の中には、青手学校在籍と去ふだけで、出席のよくな
い人が多くあります。之は今迄青年教育の不完全を、軍隊で補ふといふお上の方針と考いられ
ます。將來は是非二人を風に成り行くことと信じます。検査前に勉強して青年教育を受けない
人は軍隊に入つてから一倍人より苦勞するものと覚悟あつて然るべしです。

渡瀬部隊を慰問のため本校でも取り敢えず、生徒名々から一本づつ手紙を書き送ることに
しました。女子部の方は先般既に送りました。今頃はアノ赤い夕日の満州の草原に披いて、ほ
笑みつく感謝の涙を催してゐるであらふと思ひます。曾つて此の経験を持つ私共は、往時異境
に敵と対陣して、只一死奉公を完ふすとの心の慰めより外にない時、母國より而も古郷の夫
れも兄弟の如き同僚乃至下級の人々から、身の上を察せてくれる励ましてくれる一片の手紙は
何と力強い何と喜ばしい、何となづかしいものであろうか。私共は努めて此の企を再々してせ
めて手紙の上でも此等藩屏のつはものを慰藉して上げたいと思ふ。

七月新に入学者の姓名 (男子部)
第三年へ 持丸勇次郎、 第一年へ 田代廣人

清州へ派遣せし再履任者ニ精勵シツ、アル。福岡達君は七月一日附歩兵一等兵ニ進級シ、
タト。云フ通信ニ持シ是ニ感激イモノガアリマス。皆サント共ニ福岡君ノタメ吾我大村ノタメ
大ニ祝意ヲ表シマセウ。入營六月ア此ノ特典ニ浴ニタコトハ。君ニシテハ五モアルベキコトト
ハ向セ大勢ノ中カラ選ハレタコトハ。過去精勵努力ノ結果ガ現ハレタノデアリマテ。深ク敬意ヲ
表スルモノデアリマス。

八月十五日此ノ大村デ。小笠原島女子青年團ノ祭会式ガ行ハレテ定テス。此ノ祭会式ニ参加
スルニ由島。續島島方面カラ園ノ幹事ト園員其他ノ關係者ガ未島ニ來テ。定メシ八月八日ハ
コトアセウ。ソレニツケテモ。各地カラ澤山ノ人ガ來マスカラ。オ互ニ注意シ合ツテ。不
潔ノナクヤウニ。持ニ青年各自ハ男女ヲ問ハズ戒心ヲ要シマス。
散念如何ニ暑イカラト申セ。制服ヲ着履ル以上ハ。上衣ヲ半令着テ。帽ヲ半令願ニ戴
タマハ。ワイシャツノ袖ヲマクツテ往來ナドヲブラノ。セヌヤウ。人カラ何カ尋ネテシタ
マナド。上長ノ人々ニハ相当ノ禮ヲツクシテ答フルヤウ。同輩ヤ其他ノモノニ対シテモ決シテ
面剣ト思ハス禮切ニシナケレバナリマセヌ。

衛生ニ注意シテハ申スマデモナク。十二分ニ注意ニ特ニ傳染病ノ予防ニハ一層ノ留意ヲ要シマス。
夏ハ心身練ルノ好期デス。非

青

(一) 患想病

新規を外来思想なり何でもござれ
堅実な思想は俺達青年には古くさい
なごり夢中に在る青年 こんな



患想病は可なり危
険な 皆まん傳染
したる身位です
寄りぬが大争
迫ると大変
です 御用心
々々々

(二) 幻惑病

勤人が 新らしい洋服をまきて呑気態に
歩いてみるのでも見ると、急に汗くさい
脂くさい心が出て、さうして
働いてみる自分が 情なくなつ
てきて、つまらなく
悲觀し始め
自信のない
意志の弱い
青まが、ま
にもなくかゝる
病気で
意気地なし
ご用心



左でしこ第百六十九號
昭和十一年七月號

大村尋常小學校なでしこ編輯部発行